特定非営利活動法人　九州大学こころとそだちの相談室　第34号

発行日　2018／3／28

こだち　News

巻頭言

目次

森岡正芳先生公開スーパーヴィジョン　ご報告　2

2017年度心理臨床サービスの推移　3

コラム「“修復”という作業」　3

掲示板　4

平成29年度の事務局

事務局の体制は以下の通りです。

理事長：
　黒木俊秀
顧問：
　田嶌誠一
　野島一彦
専務理事：
　金子周平
心理臨床部長：
　山口雄介
事務局員：
　諫山千絵
　金子光代
　香野有咲
　阪木淳子
　髙橋大樹
　牧山翔子
　柳　裕哉
準事務局員：
　饒田紗世
　（五十音順）

有料心理相談室のゆくえ

NPO法人 九州大学こころとそだちの相談室　理事長
九州大学大学院　教授
黒木　俊秀

九州大学教育学部に心理教育相談室が開設され、有料で一般の来談者の心理面接に応じるようになったのは、1981年のことです。前年に、京都大学でわが国最初の心理教育相談室が開設されましたので、2番目になります。九大に続いて東大でも1982年に開設されました。当時、病院でもない教育機関の相談室業務を有料化することに文部省はひどく難色を示したそうです。それが可能になったのは、三大学の教育学部長を、前田重治（九大）、河合隼雄（京大）、佐治守夫（東大）という臨床心理学を専門とする教授がそれぞれ務めていたからであり、三人で団結して粘り強く陳情したことが、時の文部大臣、田中龍夫氏を動かしたと言われています。現在の僕たちは当たり前のように思っている有料の相談室ですが、大学におけるその開設は、わが国の臨床心理学教育の大きな礎となりました。臨床心理士の養成が相談室臨床を基本としてきたことは言うまでもありません。ちなみに山口県選出の田中大臣の地盤を後継したのが、「心理職の国家資格化を推進する議員連盟」会長を務めた河村健夫議員です。

現在、全国の臨床心理学系大学学部・大学院は、公認心理師カリキュラムの整備に余念がありません。公認心理師教育の特色の一つは、学部、大学院ともに保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の５分野における学外実習が必修化されていることであり、とくに医療機関における実習は必須です。もちろん、大学院の「心理実践実習」科目に、学内の相談室実習を含めても差し支えないのですが、主要５分野には含まれないのですから、従来の臨床心理士養成教育と比べると、相談室臨床の比重が軽くなっていることは否めません。多職種連携・地域連携が、公認心理師教育の主要な到達目標の一つですから、学外実習の重点化は当然のことでしょう。しかし、だからと言って、学内の相談室臨床を軽視して良いのでしょうか。

以上のことは、こだちのような有料の心理相談室の今後のあり方にも関わってくる問題です。わが国の対人文化において、有料の心理相談室が果たすべき役割について、改めて問われているように感じます。いま一度、原点に立ち返って、教育機関がなぜ有料化したのかと自問してみたいと思います。

森岡正芳先生 公開スーパーヴィジョン　ご報告

　年が明けて2018年1月28日（日）に、森岡正芳先生（立命館大学総合心理学部 教授）をお招きしての公開スーパーヴィジョンを開催いたしました。ナラティヴ・アプローチを中心に研究と実践を積んでおられる森岡先生と共に、事例提供の香野有咲先生（筑後吉井こころホスピタル）と約60名の参加者とで作り上げた、濃厚かつ温かい時間となりました。

　司会の増田健太郎先生のリードで、参加者の間で意見の交流を行い、全体の場でも盛んに質問が出ていました。九州一円から集まった参加者の方々の臨床と学びに対する意気込みがひしひしと伝わってきました。

　森岡先生のお言葉の中で、セラピストがクライエントの「語り」の「立会人」になることについて触れられたことがありました。クライエントが体験していることを語りで「再現」しているところに、また何かの判断や報告をするところに、セラピストが「立ち会う」。何か画期的な解決策を提案したり、叱咤激励したりするわけではありませんが、その体験の作業に寄り添い、立ち会う。患者さんに“先生”と呼ばれることがあまりないという“香野さん”にその現場に立ち会ってほしいという患者さんの希望が随所から垣間見えました。そして、立ち会ったことで患者・セラピスト双方の体験が少しずつ遷移していくのが見て取れました。また、森岡先生や参加者の方々は、香野先生がこの患者さんとの体験を活き活きと再現するところに立ち会い、その味わい深さに触れたのでした。

　森岡先生と香野先生の和やかさと温かさが織りなす、自由にお話しできる緩やかさが、とても象徴的な会でした。

発表者より

　公開SVという大きな舞台での発表はとても緊張しました。しかし、森岡先生の物腰の柔らかさと温かなお言葉に励まされ、私も落ち着いてケースをふりかえることができたと思います。クライエントと交わした言葉に注目するだけでなく、遊びを介したやりとり自体にも象徴的な意味合いがあったことに気づく事ができ、ケース経過の見方が大きく変わった体験でした。貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

香野 有咲 先生（宗仁会 筑後吉井こころホスピタル）

第12回定時総会特別企画

田嶌誠一先生 講演会

現実に介入しつつ心に関わる心理臨床　―「体験の支援」という視点から―

日　時　2018年6月10日（日）13:00～14:30
会　場　九州大学西新プラザ　大会議室（福岡市早良区西新2-16-23）
講　師　田嶌 誠一先生（当法人顧問／九州大学名誉教授）
対　象　臨床心理士（受験資格者を含む）、医師、コメディカルスタッフ、臨床心理学を学ぶ大学院生
定　員　200名
参加費　会員2,000円　非会員3,000円

詳しくは、案内のチラシまたはこだちのホームページをご覧ください。

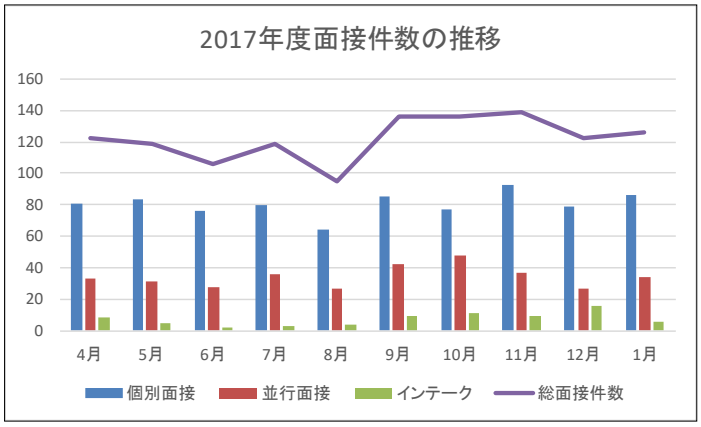
2017年度　臨床心理サービスの推移

当法人の基幹事業である、「カウンセリングルーム こだち」を含む臨床心理サービス事業についての中間報告です（2月1日現在）。

右表は、臨床心理士が言語面接・遊戯面接を行う「カウンセリングルーム こだち」の件数の推移をまとめたものです（並行面接は1回で2件のカウント）。夏季・冬季休業期間を除き、個別面接が80件前後で推移しています。インテーク（初回面接／個人・親子含む）は各月概ね5件～10件程度で、今年度は例年に比べて少ない状況にあります。お仕事をされていたり学校があったりという方が多くご利用になっていることもあり、平日は件数が多くないものの、土曜日には相当数（最大20件程度）の面接を実施しています。

総面接件数は概ね120～140件となっていますが、例年に比べると大幅に少ない状況です。継続の面接は安定して行われていますが、ひとえに、新規の問い合わせおよびインテークに結び付くものが例年に比べて少なくなっていることに起因すると考えられます。

切実に支援を必要としている方のもとに確実にこだちの情報が浸透するよう、ホームページの刷新、Facebookページ等の媒体の活用、公共スペースへの案内チラシ設置などといった広報努力をしておりますが、実数には結びついていないのが現状です。こだちのサービスのことをご存知の方や、家庭学習支援やフリースペース等の事業のご活用を検討されている現場の心理職の方々に、より力強いご協力をお願いしたく存じます。



また、2017年度より、私立通信制高校へのカウンセラー派遣、企業の職員向けの外部カウンセリング委託事業など、新しい支援の形を展開しております。「もしこんなことが可能なら…」というご希望がありましたら、まずは事務局までご相談ください。

コラム　「修復」という作業

考古学を専門とする方に、こんなお話を教えていただきました。

遺跡や古墳などから発見された出土品や遺物の多くは、長い年月を経たことで、表面が削れてしまったり、破損してしまったり、部分的に失くなってしまったりしています。これを様々な見地から検証しながら、展示や保管に耐えられるように修復の作業を行うのですが、この「修復」という作業をめぐって、考古学界を真っ二つに分けて激しく議論される、2つの異なった立場があるのだそうです。

1つは、見つかった遺跡などの特徴や炭素年代測定、地層といった手がかりから、その遺物がもともとどのような状態であったかを考察し、「元通りに戻す」という立場です。例えば千年前のものだとわかったら、千年前の姿がどうであったかを想像し、その千年の時間が巻き戻ったかのように、あるいはなかったかのように新品同様にするのです。色鮮やかな塗装や金箔、精巧な細工が現代に蘇ります。

そしてもう1つは、作られた当初はさぞかし美しかったであろう遺物が長い時間の中でその身に刻んだ歴史を残し、致命的に破損したところだけは手当てをする「歴史を保存する」立場です。千年なら千年、表面の傷は消すことができても、経験してきた時間を無かったことにはできません。金箔を貼り直しても千年は千年。ならば、「千年経た器とはこうなのだ」と残すことが、その歴史を尊ぶことになります。

その考古学者さん曰く、日本では比較的後者の立場が好まれるそうです（おそらく諸説あるでしょう）。

これははたして、考古学の歴史的遺物だけの話でしょうか。人もまた、そうではないかと思います。大変な経験をすると「無かったことにしたい、あの頃に戻りたい」と思うのが世の常。しかし、無かったことにできない歴史をその身に刻みながら、取り返しのつかないことだけは手当てしつつ、その歴史を抱えた人として、歴史と付き合いながら生きるあり方を模索する。その「修復」の現場に立ち会う、そうありたいものです。

（こだち事務局）

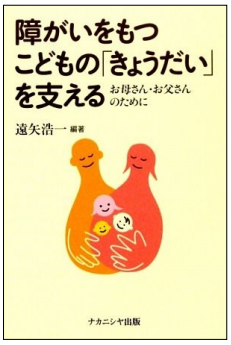
掲示板　こだちよりお知らせ

障がいをもつこどもの「きょうだい」を支える
お母さん・お父さんのために

遠矢浩一（編著）
ナカニシヤ出版

当法人の市民向け臨床心理学講座「こだちゼミナール」で今年度に講師をしていただきました、遠矢浩一先生（九州大学大学院教授）が中心になって2009年に出版された本です。

親ごさんが、障がいをもつお子さんに微に入り細に入り気を配っている陰で、どうしても手薄になりがちなほかの「きょうだい」。「わたしがしっかりしなくちゃ」と年齢不相応にしっかりした「良い子」になったり、「ぼくが一生面倒をみなくちゃいけないんだ」と自分の可能性を閉ざしてしまったり、「きっとお母さんはわたしのことを好きじゃないんだ」と思ってしまったり。避けがたい悩みと生まれながらに向き合い続けているきょうだいに手を差し伸べ、子どもとして・子どもらしく育つことに寄り添うための1冊です。親ごさんにも、支援者の方にもおすすめです。



【メンバー募集】「ココロンズ」からのお知らせ

こんにちは。こだち事務局の山口雄介です。みなさまは、「ココロンズ」をご存知ですか？「ココロンズ」とは、九州大学心理教育相談室の有志によって立ち上げられた草野球チームです。勝ち負けにこだわらない“エンジョイベースボール”をモットーに活動しており、不定期で児童養護施設の子どもたちと試合を行っています。メンバーには男性・女性、野球経験がある人・無い人さまざまです。こだち所属の方を挙げると、伊原出さん、上手幸治さん、増田有亮さん、吉岡和子さんなどが在籍しています。メンバーの知人が参加することもあります。

「ココロンズ」は野球を通じて、子どもたちが他者との交流を楽しみ、自分が尊重される体験ができることを大切にしています。活動の一端は『ココロンズによる野球を通した臨床心理学的地域援助』（伊原ら、2010）という論文にまとめられています。近年はベテランメンバーが増えており、若手メンバーを募集中です。子どもたちと共に野球を楽しみたい方を歓迎します。3月25日に試合の予定です。興味がある方はこだち事務局山口まで。「レッツエンジョイ、ベースボール♪」

当法人からみなさまへ　入会のお願い

当法人では、地域に貢献できる臨床心理事業、および臨床心理士の質の向上のための研修事業に取り組んで参りました。みなさまのご支援のおかげをもちまして、これまでの11年で着実に実績を重ねてきました。わたしたち一同、これからに向かって、一層充実した活動をしていく所存です。

しかし、設立当初からの財政難は年を追うごとに厳しさを増し、質の高い臨床心理事業・研修事業を今後維持することができるかどうか、瀬戸際に立たされています。心理援助の理念に従い、営利を目的としないサービスを提供しておりますので、収入は芳しいものではありません。

当法人の運営資金の根幹は、みなさまからの会費収入で賄われております。このお願いをお読みの方の中には、過去に会員であった方や、ご職場などで回覧されている方もいらっしゃるかと思います。ぜひ、当法人会員となってくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

理事長　黒木俊秀

※2018年4月1日より会員種別が変わります

正会員　（ひと口5,000円）臨床心理士・公認心理師（予定）・医師その他対人援助に関わる方（定款参照）
学生会員　（ひと口1,000円）学部生・大学院修士課程
賛助会員　（個人：ひと口5,000、団体：ひと口10,000円）

編集後記　スウェーデンの舟歌Vem kan segla förutan vind?に「風も無いのに誰が舟を進められようか 櫂（かい）も無いのに誰が舟を漕げようか 友と別れるのに誰が涙しないだろうか／わたしは風が無くても船を進められる わたしは櫂が無くても船を漕げる しかし友と別れるのにわたしは涙してしまう」とある。お別れが得意な人などいない。春だ。（柳）

特定非営利活動法人　九州大学こころとそだちの相談室

〒814-0002　福岡市早良区西新2-16-23
九州大学西新プラザ内　産学交流棟

TEL　092-832-1345　FAX　092-832-1346
HP　http://codachi.org